

御船産の米と水

# 本物の酒が造りたい

御船のシンボルだった「白壁の酒蔵」が、二度と再生することはかなわない。だが、「御船の酒を復活させたい」という強い思いは、この町に残っていた。そして平成20年春、酒造りの壮大なドラマが始まっていくのだった。

## 酒復活への挑戦

「御船に、白壁が残ったとたら、どきやんよかったとばってんな——」

かつて、御船川沿いの風情ある町並みを懐かしむ人が決まって口にする言葉だ。

この町が誇った「白壁の酒蔵」と「醸造伝統」が消えて、すでに30年近くの歳月が過ぎていた。

平成20年春「もう一度、御船の酒を復活させたい。そして、特産品にできないだろうか」という声が、町の活性化に取り組む「みふね両岸会（藤木正幸会長）の中から沸き起こった。その思いが

「本物の酒造り」へと動き出し、酒復活のドラマが始まっていくのだった。

まず、酒造りに必要な酒造元と原料から話し合った。もちろん彼らに、酒造りの知識や経験などない。そこで親交ある隣町の通潤酒造（山都町）の山下泰雄社長を頼った。

山下社長は、「酒づくりをまちおこしにする例はありませんでしたが、どれも長続きしませんでした。御船にこだわった酒を、長く続かせるようにリスクを減らすことが知恵のだしどころでした」と振り返る。とにかく打ち合わせに時間を費やし、最善の



### みふね両岸会

●プロフィール  
みふねりょうぎしかい。まちの活性化を目指して、平成20年に結成。城山公園での桜祭りを始め、数々のまちおこしを手掛ける。当時5人でスタートした会員も年々増加し、まちおこしの追い風となっている。

Voice ①

酒造りに全面協力した通潤酒造（株）と通潤酒類販売（株）の代表取締役社長

やました やすお  
**山下 泰雄 さん**  
（山都町・47歳）

### 地元が潤う御船の酒造り

オリジナルの酒を造るのは非常に難しいと思っていました。そこで、どうリスクを分散して、地元に残るということを一番ポイントにしっかり話し合いました。

今回の取り組みは、細い糸を全部つなぐような感じだと思います。一度、御船の場合、（酒造りの）糸が切れています。その糸をもう一回、農家、メーカー、小売店、飲食店、消費者でつないでいく最初の作業だと思います。その思いがないと、この先がつながりません。プロジェクトには、最初から酒を造ることがゴールではなく、その先を見据えていたことが大きいですね。だから、御船の酒を復活させるのは、われわれ山都の人間として、必要性でもあり、必然性でもありました。

い味方となっていく。

### 酒プロジェクト始動

方策が練られて、酒復活に全面協力した。まず目をつけたのが、酒造りの命となる原料の「水」と「米」だった。あくまでも御船産にこだわった。

そこで考えついた場所が、田代地区の吉無田水源。この水は、熊本名水百選の一つで、農業用水としても山間地域の広範囲に供給されていた。まさに、これ以上の水はなかった。

そして、酒米を作る場所の協力者が、水源に近い田代地区力石に現れ、酒造りの心強

21年春、みふね両岸会から酒造りの提案を受けた町観光協会（吉田誠地会長）は、町商工会や御船ライオンズクラブなど9団体へ協力支援を図り、御船酒プロジェクト（吉田誠地実行委員長）を発足させた。酒プロジェクトでは、▽製造▽販路▽工程管理▽メディア戦略▽原酒祭り—の5つにチームを編成して作業を分担。主に▽酒米の栽培▽水の運搬

▽酒の名前▽原酒祭りの日程—などの工程を管理して、同時に進行していった。

21年10月、酒米を収穫後、約1.5トンを通潤酒造（株）に運搬。酒造りは、▽精米▽洗米▽蒸し▽麹づくり▽酵母づくり—の工程を経て、最後の仕込みへと入っていく。

22年1月、吉無田水源から仕込み用の水約2トンをくみ上げ、通潤酒造（株）へ搬入した。しかし蔵職人から「この水では仕込めない」と首を横に振られる。使用したポリ容器のにおいが水に付着する重大なミス

を犯していたからだ。急ぎ専用タンクを手配して、水を運びなおした。

そうした多くの苦難を乗り越え、蔵の中で御船産の原酒は熟成していった。完成した原酒を山下社長は「きれいですっきりとした、飲みやすい辛口の酒」と太鼓判を押す。

酒の名は「水」をテーマに約20候補の中から、「水の鼓動」と名づけられ、御船の酒として命を吹き込まれた。こうして復活した酒「水の鼓動」を披露するため、「原酒祭り」が開催されたのだった。



酒プロジェクト会議では、酒米、水、銘酒づけ、原酒祭りなど、綿密な打ち合わせが幾度となく行われた

田代地区力石で栽培した酒米を収穫する同地区の協力者



酒造りに使用された吉無田水源の水は熊本名水百選の一つ



Voice ②

銘酒「水の鼓動」の名づけ親で御船ライオンズクラブ前会長

ふじむら ひさし  
**藤村 久 さん**  
（御船・63歳）

### まちづくりへの鼓動に

銘酒は、「吉無田の水」がテーマでした。いつも「水」と「人」を掛けて考えていました。

「水の鼓動」と考えつくまでに、いつも頭の片隅から離れず、寝ても覚めても考えていましたよ。（酒プロジェクトの）会議中に、「あーでもない」「こうでもない」と議論を交わしていたとき、ふと「音」を感じました。

実は、「水」も同じです。上流の滴から川の流れが生まれて、下流へとつながっていきます。そこに滴があれば「ドドーッ」と音を立て「鼓動」となることに。酒を通じて、まちづくりへの大きな「鼓動」への願い、有志の息づかいが鼓動となり、響きわたればと考えつきました。有志が何かをする動きが「水」と重なり合った瞬間でした。